

光明第十五号

様

住岡狂風

□ 汗を流して、自分で生きて行くことは、この上もなく自分にとってはいはうれしい尊いことです。

□ 自分がいるために、親や兄弟や、隣人や、友人や、その他のものが幸福を得る。自分が生きているために、それ等の人が生きていると思えば、自分の生きていることはこの上なくうれしい。

□ 私たちには智慧がない。財産がない。けれども赤い紅い血と、清い尊い汗がある。働くだけ血は愈々紅く、汗はいよいよ尊い。山のような建物も、幾億の財産も、永劫の破壊には如何とも出来ない。残るものは、唯血と汗の歴史。

春は今

春雨が続くと、花は開きます。芽が地上にもえ出ます。かくして世は、この世ながらの極楽と変ります。人は酔つて来ます。花に、酒に、しかしながら、目覚めんとするあなたは、その酔いから、あなたの心を引きもどして、花や蝶のその裏に横たわっている、偉大な力の声なき叫びを下さい。

1

たった二人

私たちは、幸福な春に、この世の花の香に生きてることを感謝しているのに、去年の暮、まだうら若い妹が二人―谷本さんと重富さんが―寂光の都に急がれたことが、如何に悲しさを思わせることでしょうか。来る春も来る春も永遠に、二人の妹を花のかげに見ることは出来ない。永遠に母の懷に抱かれた二人は―

巻頭の叫び

一、目覚せよ。目覚めよ。！

目覚めたる人の為すことは、よしそれが麦を培ふことであろうが、車挽くことであろうが、皆これ、天地永遠にわたる創造である。

目覚めざる人の為すことは、たとえ千の倉庫に、金銀財実を積むとしても、万人に施しをするとしても、ただ千の我慾を充たし、万の罪惡を積むに外ならない。

全ての人は目覚しなればならない。目覚すべく、目覚むべく人間として生れた。そして、多くの人は、それを忘れた。その途中で功名と利達と、物質に眼が眩んで。

鹿島に行こうと出発した者は、鹿島まで行かねばならぬ。途中で、そこらにあきれていてはならない。目覚めよ。目覚めよ。

一、妹たちよ、女たちよ、何も出来ないでも、たった一つ、僕が言うたった一つを必ずしてくれ。

あなたの心霊の底にある、目覚めたる愛の泉を濁さないで、あなたが生んで育てるあなたの子供に、吸はしてくれ。

教師の訓話どころか、釈迦の説法も、孔子の説諭も、あなたの愛の味を知らない人間の子に、何で、孝行を知らずことが出来ようぞ。

愛の泉の枯れ果てた家に育つた人の子が、如何にひがんで人生や人を見るか、如何に人間味が失われているか、如何に社会に害を流すか、私たちは、たくさん例を見せつけられている。

たった一つあなたの育てる子に、真実の愛を注いでくれ。それで貴女の大きな務めの一つは出来る。愛を知らしめないで子を育てることは、罪悪だ。

「祈る心」についてお答えします

「先生は常に祈り祈りとお言いになります、祈ることはよいことでしょうか。先日2も『先生は耶蘇教だ』と言っている人がありました。私は仏教を信じています。先生の教えを聞いているのが恐ろしいような気がします。先生も仏教信者とは、聞いていますが、先生のほんとの心を言つて下さい。祈つてもよいものでしょうか。」

以上のような、私にとっては何れも面白い問いが来しました。多くの人たちが、何を言つてあつても無自覚に読み、無理解にほつているのに対して、こうした大問題を提げて来てくれることが、この上なくうれしいと思います。

まず最初に、私も仏教信者であることを言つておきます。そしてその次に、「あなたは真実仏教信者ですか。真実仏を信じていますか。」と私の方からお問い致したいのです。真に仏を信じ、神を信じている人ならそんな馬鹿げた問いはないはず。しかし私はあなたを悪く言うのではない。「祈る心」を平気で聞く者は、哀れな無自覚の人と、神や仏を信じた人のみである。あなたこそは、その哀れな無自覚から醒めかけた尊い方で、しかもその途中で迷っている哀れな方です。

私たちの心は、祈る心と呪う心とで一ぱいになつてゐる。私たちが一切に対する祈る心を除いたら後になにが残るだろう。祈りとは、我々の人間としての最も美しい、仏や神のように美しい心の表れではあるまいか。我々のやるせない心の願い、その願いの現われは祈りである。然り、祈りは願いである。願いのないものは、死物か、絶対円満無碍自在の域に達している者、即ち神か仏かでしょう。祈ることを恐しいというあなたも人間である以上祈る心はなければならぬ。

よくわかる様に例をあげて言いますと、あなたの親が病気になったとします。あなたには、よくなれ、早く治れという願いはありませんか。親の病は重くなつて来ます。それでもあなたは、平気で「生れたものは必ず死ぬる。もう医者も手をきつた。もう仕方がない。」と言つてほつておきますか。人間には出来ないことです。もうとても望みはなくても最後の注射を施すではありませんか。祈りです。祈りです。真実絶対の親の愛の前にぬかづいた私たちには、「もう親も死んでもいい年だ。寿命は人間の力では如何ともすることも出来ないものだ。」と言うので、一滴の涙も落さず「よくなつてくれ」という心願もおこさないでいることが出来ましようか。出来ることなら自分の命は縮んでもと、祈らずにいられましようか。祈りがなかつたら孝行ではありません。親の愛を信じ、親の真実に泣いた人から、その尊い祈りが取れますか。

畏くも明治天皇が崩御あらせられるその前、七千万の赤子は、寺に宮に、宮城の前に天皇の御平癒を祈つたではありませんか。天皇の御徳、天皇の高恩に感泣した七千万国民の赤誠のほとばしりです。私たちの心が至純に真実に、崇高に輝く時、それは祈りとなつて表れます。あなたよ、おおあなたよ、死にかかつた親の枕もとに坐つたあなたに、よくなれという祈りもなく、日本が外国と戦いを初めたその時「敗けてはならぬ。勝たねばならぬ。」という祈りもないとしたら、ああその後何が残ります。それでもまだ祈ることがおそろしいのですか。あなたのような人がいるから、開放された信者が真宗から出ないのです。

もともと、宗教は、自己の無明、無智、罪惡を愧じ、天地、宇宙、真如の完全、秩序、整然、莊嚴に打たれて、自己の心眼を開いて、その真如に救いを求める生活それが宗教ではないか。「救われたい」という祈りを置いてどこに宗教があるでしょう。あなたは、根本からまちがっています。宗教生活どころか、道徳的生活すら出来てはいない人です。善い事はしているでしょう。けれども祈りのそわない行いは、何か自分のためを思つてしている偽善です。善い事どころか偽善という大罪惡です。親鸞ほ、雑行雑修をすなと誡ました。真実の祈りをすなと言つたのではない。運命を呪うなと言つたのです。「どうかあの悪い継子を殺して下さい。」どうか私にお金を一万円ほど授けて下さい。「こんな哀れな、無智な願望は、真実の祈りではなくて、呪いです。「神は非礼を受け給わず。」呪いを受ける神も仏もありません。あなたが恐れるのは呪いです。でない、あなたは、今日まで生きられなかつたはずです。

祈りなさい。祈りなさい。あなたが持つ最も崇高な物は祈りです。祈れと言つたがために耶蘇だというなら、喜んで耶蘇にもなりましよう。「一切衆生の永遠の迷いを見て救つてやりたい。」の祈りが仏の救いの根本ではないか。あなたはそれをきいてはるはずです。私は道徳的生活と言ふのです。けれど、宗教にせよ、道徳にせよ、その根底に祈りがなくて何で真実のものがありません。

大自然に抱かれて

□ たった一人粗末な宿直室の六畳の間に坐っている。実に静かだ。押入れの前には、寄集めの戸が三枚立っている。雨じやれになつた戸や、貼つてあつたらしい新聞紙のはげあとや、戸の大ききのあるていないこと、押入れの上には、白い幕がかかつていることや何ひとつ美事なものもない殺風景な部屋である。だがしかしこの、この上もない哀れな部屋がこの上もなく好きだ。

僕の生活の意義も、祈りも、敬虔も、寂寞も、幸福も、この静かな哀れな一室から湧いて来る。障子戸を開けて、窓によつて南から吹いて来るそよ風を受けて、広く開けた田の面に目をなげる。寒さにやけた杉垣も、一面に見える一二寸にのびた麦も、すぐ前の田の名も知らない雑草やレンゲも皆一様に、暖かい春の陽を浴びている。そしてそれを見入っている私にも。ピラミッドのように立つた森山の、冬枯れの灰色に見えていた木立もこの暖かい陽を浴びて、灰色から淡紫に、灰色から淡黄に、灰色から水色に、毎日毎日変わつて行く。多くの芽が一つ一つふくらんで、若い葉の先を出して、飢えたように、暖かい光を吸っているだろう。私は、この静けさの中で、清い空気を力一ぱい吸つて、暖かい光をあびて、青い空と、地に育つ青い草の伸びるのを見ることの出来るのがこの上なくありがたい。

□ コソリコソリ落葉をふんで急な道を昇つてゆけば、天地の静けさが、ガサツガサツと破られる。葉の落ちた槓や栗の枝の間から暖い陽がさして来る。間もなく、伐り開かれた所へ出た。よく乾いた落葉の上に腰を下した。目の前は崖で、一面に高原のよな畑続きが南に傾斜して、縞のように麦が見える。太田川が宇津で曲つて森山の陰に走る。「ああ」と思わず出した声に我にかえつた。足もとには「ハクリ」が花梗を抜けて出して、蕾を出している。鳥もいない、風も吹かない。静かだ。静かだ。実に静かだ。僕はこの静けさの中にひたっている。

僕の目は山を見ている。河を見ている。木を見ている。土を見ている。僕の体は大地に横たわっている。大地についている。大地に耳をあてても、地は永遠の神秘に黙して、何も語らない。自分は今死のような静けさの中で大地に横たわつて自分を見ている。思うことの自由をもっている。ジツと自分を見ている。偽らなければならぬ苦もない。呪いもない。幸福な永遠の苦惱、そのみが妨げなく力一ぱい心中にはびこつて来る。僕は大自然に抱かれている。僕は今生きている。悠久な天地の寂寞と、無限から無限への天地の流転を感じつつ、声なき生命に憧れている。仏と言え、神と言え。何でもよい。無始から無終に互る無限の時を、今、人として生きつつ結んでいる。

「我は久遠の生命であり、宇宙存在の根源である。」

「我」をにおいては、絶対の存在もなければ、救いもない。

僕は今大自然に抱かれて、無窮の寂漠を知る幸福にわなないている。

□ 香の煙が立ちのぼる。清い香を鼻に送って。静かな夜。たった一人だ。ああ涙ぐましいこの孤独よ。僕は孤独を愛する。全ての偽善、怒り、呪い、怠惰から開放されて、たった一人静かに、自由に、努力している。せめて、今晚この時間、僕の生命の囁きを聞いている、今晚今―誰も来てくれな。春霞の広野を行くように、天地永遠の創造と寂漠を考えている。

香の煙がゆらぐ、灰がポテポテと落ちる。

僕には今、呪いもない、恨みもない。寂しみと、幸福に、心が燃えている。小使いの寝軒よ、もつと小さくなれ。僕は今僕がいるために幸福である人たちや、母一人と、兄弟三人の家庭のために祈っている。夜の静寂は、大自然の無言の愛を深刻に知らせる。

香の煙が真直ぐに昇る。

昨夜は青年が三人来た。一昨夜は細井君が来た。一昨昨夜は、四十五ばかりの婦人が来た。毎晩、宗教か人生か、道徳か哲学かの話で十一時十二時と夜を更かした。

婦人は、宗教に純朴な信仰を持っているらしかった。―それでよい。

三人の青年たちは、釈迦が方便のために説いたでたらめのお譬に矛盾を見出して、あるいは又物質的な放縱的な時代風潮の洗礼を受けて、寺の僧侶たちの説教からはなれた人たちであった。彼らは今、宗教を失った。そして、新に求めようともしていない。

実に世の中は、御光明のさした釈迦や親鸞や、金箔をつけた仏や神や、釈迦や基督に、随喜の涙をそそいでいる老人と、無智な人と、形式や譬喩に飽いて信仰を失った若者や、小さい智慧の持主で満ちている。全ての者は幸福なれ。老人よ今のままで醒めな。若者たちよ、もつと進め。

香の煙がゆらぐ。二つの火の上に。

狭い牆の中の不具にされた植木を見ている者は、大自然の恩恵から遠ざかる。――小さい金の瓶に水を入れて、手をだるがっている者よ。金の瓶を捨てて、大海に飛びこめ、大海は我がものである。・・・
もう筆をおいて寝よう。

学を為す者よ

兄等に言わん

姉等に述べん

人生の裏面には、飢えに疲れ、衣るに苦しみ、住むに苦しむ悲惨なる人たちのある中に、君たちくらい祝福されたる運命に生れた人はあるまい。およそ学を為す人たちは、全ての恩恵を多く受ける者はない。

学問は、全て過去人類の生命であり、汗と血と、そして、敬虔と努力の結晶である。一個の定理法則も人類が生んだ天才の驚くべき能力と惨憺たる努力を要し、一句の格言金言にも、人生を、自覚と真面目とで苦しんだ人たちの悲痛な叫びが表われている。

君たちが持つ教科書の一頁は過去人類万人の汗と血の歴史である。

恩を思え、過去の天才が一生の心血も、教室にある兄たちには、数分間の努力に過ぎない。勉学とは、過去数千万年の人類の、真善美に対する絶え間なき建設の全体をわずか数年に知り得て、自己の内容を充実し、向上せしむるに外ならない。我々は、書物を手にする時、まず過去の尊き犠牲に向つて、尊敬と感謝の涙を捧げねばならぬ。

学を為しつつある者は、陛下と、国家と、親との恩恵を一層深く受けている。そしてそれを知っているはずだ。国家は多額の費用を使い、兄等の親は額に汗して、老を忘れて学資を送り、元氣盛りを遊ばしている。兄等が何気なく食う一ぱいのうどんにも一個の菓子にも兄等の親には、野菜と漬物との貧しい食物で事業や労役や、生活に日夜営々として、尊き犠牲の払われていることを忘れてはならない。

私たちが勉学する態度は、真面目でなければならぬ。突進でなければならぬ。奮闘でなければならぬ。脇道にそれてはならない。不健全な思想に溺れたり、慾望の囚となつてはならぬ。墮落してほならぬ。

私は、前野良沢の話の思い出す。前野良沢は、豊前中津の人であった。ある時人から、和蘭^{オランダ}の書物を見せられた。しかし、時は徳川時代で、今日の様な時ではない。外国人とてもオランダ人のみ長崎に来ていた。

良沢は、それを見ても読むことが出来ない。しかし「人間の書いたものを読み得ないことはない。」と、ついにオランダ語研究にかかったが、長崎にも、会話は出来ても字の読める人が少なかった。唯、当時江戸に青木昆陽という人があって、昆陽ばかりは、オランダ語を知っていた。しかし、その昆陽とて、優に、六百語にすぎなかった。外国語の六百語と言えば、今日の中学の一年か二年かでも知っている。しかもその昆陽が日本一のオランダ語学者であった。そこで前野良沢は、この青木昆陽について、その六百語を皆習った。もちろん今日の如く日本語に訳した辞書はない。六百語習えばそれきりである。

その頃ちようど、江戸の小塚原で、罪人の腑分けとて、身体の解剖があった。良沢は賢者であったから、それを見せてもらうことになった。その時良沢は「ターヘル・アナトミア」というオランダ語の解剖書を持つて行った。読むことは出来ないでも、その中の絵でも参考になればと思つたからである。罪人が解剖されるのを見ると、「ターヘル・アナトミア」の中に書いてある絵と少しも違わないのを知つた。良沢は、

従来の漢方医の考えと較べて、その正しいのに驚いた。ちようどその時、やはり「ターヘル・アナトミア」を持って、解剖を見ている人を見た。それが、かの杉田玄白で、良沢と玄白は、その時初めて相知りあつた。「如何にもして、このターヘル・アナトミアを日本語に訳して、世の人知らせたい。」それが二人の切ない願いであつた。そこで二人は力を合わせて、僅か六百語を横りにして、ターヘル・アナトミアを訳しはじめた。しかし、わずか六百語ではその困難が思いやられる。二人で一日の辛苦も数行を訳し得るに過ぎなんだ。

ある時、ある語を読むことが出来なんだ。オランダの字引をひいて見た。その字引には「木を伐つた跡」とあつた。顔の中で、木を伐つた跡、さつぱりわからなかつた。又外には「塵埃を掃いたあと」とあつた。顔の中で塵埃をはいたあと、やはりわからぬ。四五人の人は、朝から考えはじめたがわからない。昼すぎになつて、一同考えつかれてゐる時、玄白は手を打つて「分つた」と言つた。一同は、その方を見た。「木を伐つたあととは高い」「塵を掃き集められれば高くなる。顔の中で高いところは鼻だ。」と言つたので、一同宝玉を得たほど喜んだそうなる。かくの如く、苦心に苦心をかさね、一字にも半日を費して出来たのが、解体新書一卷である。

今日の勉学はあまりに楽すぎる。外国語を研究するにも、如何なる辞書でも出来ており、如何なる難しい事でも、直ちに教える先生がある。思ひつた事で何が出来ないうちがあるでしょう。

全てに対して、敬虔な態度をおもちなさい。

あなたを墮落さすためには、女が、笑ひと媚と酒を以て待つています。活動、芝居、料理、飲食店等は、弱い人たちの失敗墮落の門口です。ウソと下腹に力を入れて、そんなものにつかれないように、そして、一日一目と先人の後をたどつて向上なさい。

後記

□ 悪性の風邪は流行します。学校にもおそつて来ました。本月は、たつた三人で学校の授業を切り廻して行つた事さえありました。

今はちようど学年末です。光明十五号が如何に苦しく生まれたかお察し下さい。

皆様よ、苦しんでいる人、寂しがっている人、悪い人、求めている人を見出して、それらの人を救つて下さい。最も善良なる人は、人を救わなくてはなりません。

ただ真面目であつたらいい。本気の方なら、どんな人でもよい。一人より二人、二人より三人、あなたの力で光明を知らせてあげて下さい。